

令和2年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ ムーブメント全国展開事業

実 践 事 例 集

実践事例集について

本事例集は、令和2年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」において、各地域拠点の推進校で実施されたオリンピック・パラリンピック教育の特徴的な事例を集約したものである。後述する5つのテーマ別に、全国の推進校から計45事例を抽出し、あわせて巻末には筑波大学附属学校群における2事例を掲載した。令和3年度以降の有意義な事業展開に向けた参考資料として、また2021年の東京大会を契機とした日本のオリンピック・パラリンピック教育に関する記録として活用されたい。

1. 本事業の目的

東京2020大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針（平成27年11月27日閣議決定）において、政府は「大会開催を契機に、オリンピック・パラリンピック教育の推進によるスポーツの価値や効果の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて貢献できる人材を育成する」ことを決定した。また、文部科学省およびスポーツ庁で組織された「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（平成27年2月～平成28年7月）」の最終報告では、全国的なオリンピック・パラリンピック教育の普及の意義として、以下の内容が提示されている。

(1) スポーツの価値

- ・スポーツは、精神的な充足感や楽しさ・喜びをもたらし、人々が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む基盤。
- ・スポーツには、自己充実・自己変革を促す力、社会や世界を変える大きな力がある。

(2) オリンピック・パラリンピックの理念とオリンピック・パラリンピック教育の意義

- ・オリパラ教育の推進には、オリンピックの3つの価値（卓越 Excellence、友情 Friendship、敬意/尊重 Respect）とパラリンピックの4つの価値（勇気 Courage、決意 Determination、平等 Equality、インスピレーション Inspiration）が必要。
- ・オリパラ教育は、スポーツの価値の再認識を通じ、国際的な視野を持って世界の平和に向けて活躍できる人材を育成するもの。

(3) オリンピック・パラリンピック教育の具体的内容

- ・オリンピック・パラリンピックそのものについての学び（大会に関する知識、選手の体験・エピソード等）
- ・オリンピック・パラリンピックを通じた学び（スポーツの価値、参加国・地域の文化等、共生社会、持続可能な社会等）

本事業は、主に上記の内容および平成27年度スポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント調査研究事業」の成果をふまえ、全国中核拠点（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）と地域拠点（各自治体教育委員会等）が連携し、学校や地域

一般におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを推進することを目的とするものである。

2. 令和2年度の事業概要

令和2年度における全国中核拠点と参加地域拠点を以下に示す。各地域拠点では、担当大学の支援を受けながら、東京2020大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の実践を展開した。

筑波大学：宮城県、福島県、茨城県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、和歌山県、島根県、山口県、徳島県、愛媛県、福岡県、京都市、北九州市

日本体育大学：北海道、栃木県、千葉県、新潟県、石川県、山梨県、兵庫県、岡山県、高知県、大分県、千葉市、新潟市、大阪市、神戸市、岡山市

早稲田大学：岩手県、埼玉県、岐阜県、静岡県、三重県、滋賀県、鳥取県、広島県、香川県、熊本県、鹿児島県、札幌市、横浜市、静岡市、浜松市

また各推進校では、以下の5つのテーマに基づきオリンピック・パラリンピック教育が実践された。なお、同テーマはスポーツ庁および関係団体（内閣官房オリパラ事務局、東京2020組織委員会、東京都教育庁、日本オリンピック委員会、日本パラリンピック委員会、日本財団パラリンピックサポートセンター、筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）から構成される「スポーツ庁オリンピック・パラリンピック教育全国中核拠点会議」において議論され、決定されたものである。

（本事業における「オリンピック・パラリンピック教育」のテーマ）

オリンピズムの教育的価値（努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、卓越性の追求、身体・意志・知性の調和）、パラリンピックの価値（勇気、強い意志、インスピレーション、公平）の普及に向けて、以下のテーマを設定する。

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

本事例集では、各地域拠点の推進校における「実践報告書」の文面を抜粋し、冊子体裁の都合上、一部編集・用語の統一を行っております。なお複製、転載等の際には、スポーツ庁による承認手続きが必要となります。

実践事例 14 横浜市立南吉田小学校（横浜市）

1 実践のテーマ

ゆるスポーツづくりを通じたスポーツの多様性についての学習

2 対象者

第4学年 100名、第5学年 131名、第6学年 124名
全校児童 692名、各学年代表児童 24名

3 展開の形式

【学校における活動】

教科名：体育

行事名：運動会

その他：自分づくり（キャリア）教育、総合的な学習の時間

4 目標（ねらい）

- スポーツに関する興味・関心の向上
- オリンピック・パラリンピックの歴史、基礎知識等の獲得
- ゆるスポーツやパラリンピック種目の体験によるスポーツに関する見方・考え方の変容
- 多文化理解、多様性を尊重する態度の育成
- オリンピック・パラリンピアンとの交流を通して、自身の生き方についての探求、未来への夢や希望をもつことができる心の育成
- オリンピック・パラリンピックを通して、自分たちが住む「まち」とつながり、街の人や地域を大切にする心の育成

5 取組内容

- スポーツに関するニュースや各学年の活動記録の掲示

【具体的な掲示物】

- JSPO から配布されているスポーツニュース
- 各学年の、体育科での学習の足跡

- ゆるスポーツに関する取組

①ゆるスポーツ体験の事前学習

【具体的内容】

国際パラリンピック委員会公認教材「I'm possible」を活用し、誰もがスポーツを楽しむという点を知り、スポーツへの考え方を広げるための学習を行った。

②ゆるスポーツ協会の方々による活動

【具体的内容】

指導者：ゆるスポーツ協会

内容：ゆるスポーツ体験、ゆるスポーツの考案、
ゆるスポーツの考え方を生かした、運動会競技の作成

○南区役所地域振興課の方による、パラリンピック種目「ボッチャ」の体験

○多文化理解、多様性を尊重する態度の育成に関する取組

○運動会での多言語放送

○運動会での聖火リレー（外国につながる児童が、つながる国の衣装を着用し、開会式の聖火ランナーを務めた）



○オリンピック・パラリンピアンとの交流

①事前指導

【具体的内容】

○国語の「伝記を読み、自分のこれからの生き方について考える」の学習では、さまざまな人の人生経験や考え方をまとめ、自分の生きた方について考えた。スポーツ選手の伝記、自伝も副教材で多く扱い、オリンピック、パラリンピアンの生き方、考え方に共感する児童も多くいた。

○体育科の「マット運動」の学習では、自身の力にあった技を選択し、練習に取り組んだ。それぞれの技の質を高めたり、新しい技ができるようになるためのポイントや練習方法を知ったりするために、中瀬選手に実技指導を受けることの必要感をもった。

②北京五輪体操日本代表中瀬卓也選手による講演、実技指導

③高橋尚子さん、河合純一さんとのオンライントークセッション

【具体的内容】

○昨年度受賞した、「東京 2020 みんなのスポーツフェスティバル」の表彰式が中止となり、今年度あらたにトークセッションをオンラインで行った。今年度開催した、運動会について、児童代表からアスリートの方へ、自分たちの運動会の魅力や行い方などについて発表を行った。アスリートの方からは、自分たちが行った運動会を価値づけてもらったり、次年度以降の開催の仕方へのアドバイスをいただいたりした。

○地域交流

【具体的内容】

南区役所と協力を得て、ペットボトルキャップアートを作成、ライトアッ

イベントを行った。壁画の材料となるペットボトルキャップを集めるために、校内や地域の人へ呼びかけた。5年生の実行委員が中心となり、企画・作成に取り組んだ。ライトアップ期間は、大通りを通る多くの人が見てくださり、地域とのさらなるつながりを得た。①オリンピック・パラリンピックを盛り上げたい②世界中の人が一同に集まり、スポーツを介して互いに楽しむ日が一日でも早くくることを願いたいという想いを表現した。

6 成果

- 次年度行われるオリンピック、パラリンピックへの感心が高まった。オリンピック、パラリンピックを楽しむ上での知識が増えた。
- ゆるスポーツを経験したり、運動会競技を自分たちで考えたりするという学習活動を通して、「スポーツ」というものへの考え方が広がった。また、「スポーツ」という題材を通して、多様性を認めたり、多文化理解をしたりする心の育成ができた。

7 実践において工夫した点（特色）

半数以上の児童が、外国につながるという本校の特徴を生かして、多文化理解や多様性を認めたりする活動ができた。オリンピック・パラリンピックの価値が本校の学校運営理念である「多文化共生」と重なる部分も多く、「スポーツ」「オリンピック」「パラリンピック」という題材を活用しやすかった。

8 課題等

- ゆるスポーツ体験を行い、学んだことを活かして運動会競技を考えていくという実践は、つながりがあり児童も意欲的に活動をすることができた。今回は、高学年を中心に本実践を展開していった。児童が主体となり、全校へ展開していければ、より主体的な学習にすることができたと振り返る。
- 今年度は、感染症予防のため、児童の学習するフィールドに制限があった。より多くの人やモノと出会わせて学習を展開していくことで、質の高い学習ができたと感じる。具体的には、子どもたちにとって身近な「横浜スタジアム」やオリンピック・パラリンピック開催にむけての「横浜」という町の取り組みなどに焦点をあてて、学習を展開することもできると考える。

実践事例協力校一覧

【幼稚園】

大洲市立大洲幼稚園（愛媛県）

【小学校】

滝川市立江部乙小学校（北海道）

猪苗代町立翁島小学校（福島県）

鹿嶋市立鹿島小学校（茨城県）

浦安市立見明川小学校（千葉県）

中能登町立鹿島小学校（石川県）

長野市立鍋屋田小学校（長野県）

羽島市立竹鼻小学校（岐阜県）

鈴鹿市立一ノ宮小学校（三重県）

岩美町立岩美西小学校（鳥取県）

津山市立北小学校（岡山県）

和気町立佐伯中学校（岡山県）

山陽小野田市立有帆小学校（山口県）

高松市立屋島東小学校（香川県）

熊本市立託麻東小学校（熊本県）

いちき串木野市立市来小学校（鹿児島県）

千葉市立若松小学校（千葉市）

横浜市立南吉田小学校（横浜市）

静岡市立中藁科小学校（静岡市）

浜松市立都田南小学校（浜松市）

【中学校】

岩泉町立小川中学校（岩手県）

七ヶ浜町立向洋中学校（宮城県）

柏市立田中中学校（千葉県）

昭和学院秀英中学校（千葉県）

沼津市立第二中学校（静岡県）

春日井市立知多中学校（愛知県）

益田市立美都中学校（島根県）

高知県立高知国際中学校（高知県）

飯塚市立二瀬中学校（福岡県）

札幌市立中の島中学校（札幌市）

京都市立七条中学校（京都市）

岡山市立上南中学校（岡山市）

福山市立加茂中学校（広島県）

北九州市立城南中学校（北九州市）

【高等学校】

茨城県立常陸大宮高等学校（茨城県）

栃木県立小山城南高等学校（栃木県）

群馬県立安中総合学園高等学校（群馬県）

埼玉県立羽生第一高等学校（埼玉県）

京都府立東稜高等学校（京都府）

岡山県立玉野光南高等学校（岡山県）

徳島県立徳島商業高等学校（徳島県）

【中高一貫教育校】

秀明大学学校教師学部附属秀明八千代中学・
高等学校（千葉県）

【特別支援学校】

千葉県立桜が丘特別支援学校（千葉県）

千葉県立東金特別支援学校（千葉県）

滋賀県立愛知高等養護学校（滋賀県）

【筑波大学附属学校群】

筑波大学附属聴覚特別支援学校

筑波大学附属桐が丘特別支援学校

令和2年度スポーツ庁委託事業

オリンピック・パラリンピック・ ムーブメント全国展開事業

実践事例集